窯焼き名代札

〔写真上〕歴史民俗資料館所蔵の名代札
〔写真下〕名代札の裏面

江戸時代、窯焼きを営むためには「窯焼名代札」の交付を受けなければなりませんでした。窯焼きとは、生産に必要な職人（細工人、絵書き、荒使子など）を雇用し、職種に応じて職場を設定する事業主のことです。窯焼名代札は５枚一組で、細工札、絵書札、底取札、水碓通札が付属して交付されました。それらには運上銀がかけられており、税金を取り立てるための札でもあったわけです。

窯焼名代札の枚数は、品質の低下を防止する目的から宝暦13年（1763）には 180枚に限定されています。また、担保能力も持っていて窯焼名代札を担保に、窯積みのたびに指定された焼き物をもって分割払いをした例もあります。窯焼きを辞めるときには名代札は皿山会所へ返納しなければならず、再び窯焼きを営むときには、改めて交付を受けなければなりませんでした。

荒使子＝窯場の力仕事に従事する雑役夫のこと

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No.15

家永壱岐守の一族

かっての石場の採石風景

有田磁器の創始期には複数の陶工集団がありました。前回はその一つである李参平について取り上げましたので、今回は同じころに活躍していたと伝えられる家永壱岐守の一族について紹介します。

安永２年（1773）家永壱岐守の子孫から、泉山の白磁鉱の発見者は、壱岐守の孫の家永正右衛門であるという訴えが出されました。これは『皿山代官旧記』（諸手当一通　安永弐巳年日記　「乍恐御詫言申上口上覚」）の記述によるもので、ここには家永壱岐守とその子孫の功績が記されています。

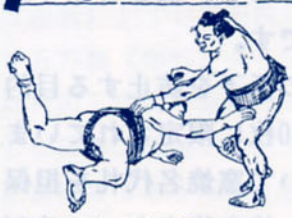
家永壱岐守は佐賀郡高木村で土器を焼いていたといい、天正年間に太閤秀吉が朝鮮出兵を企て、名護屋城に在陣したときに土器を献上し、「九州土器元」という名を許されたといわれています。その後、文禄３年（1594）に鍋島直茂が朝鮮・高島で越年したときにも吉例として土器を献上しています。

直茂は、献上された土器を見て「きんもう山に住んでいる唐人は焼き物が上手であるから、弟子となって製陶の技術を習得するように」と命じたといいます。そこで壱岐守は，きんもう山へ赴き、焼き物の技術を身につけ帰国し、唐人三人と佐賀の金立山に築窯しました。

しかし、金立山には良質の土床がなく、松浦郡伊万里の藤野川内に移って製陶を始め、その後所々で土床をみつけては焼き物を焼いています。そして有田郷小溝原で焼き物を焼いていたころ、直茂から「末々までも焼き物を続けるように」と命令を受けたといいます。しかし、陶土がなくなり仕事を続けることができなくなったため、壱岐守の孫の正右衛門が土床を探しまわり、現在の土場(泉山の磁石場)を発見し、白川山の天狗谷に窯を築いて南京焼（磁器）を焼いたといいます。

正右衛門が天狗谷で焼き物を焼いていたころ、多久美作守が朝鮮から連れてきた唐人で優れた製陶者がいました。この唐人が「自分が一手に焼き物を営みたい」と申し出、日本人陶工の追放を願い出たために日本人は窯焼きを営むことができなくなったといいます。しかし、正右衛門には上に述べたような由緒があるので、美作守から御免状を皿山代官の山本神右衛門まで差し出したといいます。

家永壱岐守と李参平は奇しくも同じ時期に有田で（小溝と三代橋）焼き物を焼いています。そして、彼らに関係する文書によれば、泉山の白磁鉱の発見者は、家永壱岐守の孫の正右衛門であるといい（皿山代官旧記）、李参平であるといっています（金ケ江家文書、多久家文書）。果たしてことの真偽は分かりませんが、泉山の白磁鉱の発見者については２説があると紹介しておきます。



雷電の日記

有田町は相撲のたいへん盛んな所で、11月中旬には石場相撲が開催され、下旬にはいくつかの地区で神待相撲が行われています。昔は相撲の興行も行われ、多くの人々が集まり賑わいをみせていたようです。

長野県在住の雷電の研究家・田中邦文さんは、彼の日記や手紙を活字になさっています。田中さんのお持ちになっている資料の中に有田関係の記事があることを知り、資料を紹介していただきました。

雷電為右衛門（1767～1825）は長野県出身の力士で、寛政２年（1790）に関脇として初土俵を踏み、初優勝しています。17年間西の大関の地位にあり、優勝25回、勝率９割６分以上で古今随一の強豪力士といわれています。

享和２年（1802）正月、巡業にでた雷電は島根、広島、山口、福岡を経て３月26日に佐賀市に着いています。そして長崎で興行を行った後、７月16日と17日の両日、有田で興行を行っています。それが果たして有田のどこで行われていたのかは不明ですが、おそらく神事の意味も濃かったと思われますので、お宮の境内などで行われていたのではないでしょうか。

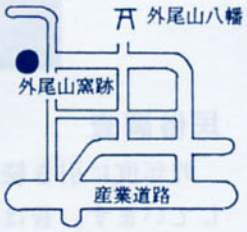
「…夫より私千田川両人同国さら山へ参り申し候ところ、有田と申す所にて二日興行仕り候。其の人

平成３年度の

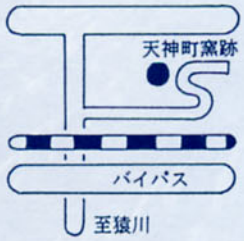
古窯跡発掘調査の視点

今年度の発掘調査予定古窯跡は、外尾山の外尾山窯跡、岩谷川内の天神町窯跡、泉山の楠木谷窯跡の３カ所です。毎年、４カ所ずつ発掘してきたのですが、今年は世界を震撼させた湾岸戦争のために３カ所に減らしました。何の関係がと思われるかもしれませんが、多国籍軍に対する１兆円の支出のために予算の削減を行った結果です。こうした調査研究の充実も平和のバロメーターであることを実感しました。

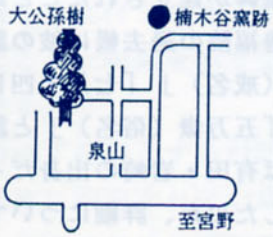
さて、今年の調査窯跡の横顔を紹介して、調査の課題をいくつか挙げたいと思います。



●外尾山窯跡　外尾山の八幡神社の西側に広がる丘陵斜面に位置すると推定されています。現在は宅地、畑などに利用されています。「外尾山」の名は承応２年(1653)の『万御小物成方算帳』に「有田皿山」の14カ山の一つとして登場します。そのころの外尾山の窯としては丸尾窯が確認されていますが、これに加わる窯であると推定されます。また、安政６年(1859)の『松浦郡有田郷図』の「外尾山」には２基の窯が描かれています。外尾山窯と外尾山廟祖谷窯の２基です。『肥前陶磁史考』によれば前者が明治年間まで操業された新窯で、後者が古窯であるとされています。窯の耐用年数を考えれば、この２基以外に数基の窯がこの地に眠っていると考えられます。すなわち、17世紀から20世紀まで、順次窯が築造された可能性が考えられます。よって、外尾山の窯場の全体の把握は１年間の調査では到底できるものではなく、今年度はまず各窯の位置を確認することを主眼に置いて調査を進めたいと考えています。



●天神町窯跡　岩谷川内に位置し、猿川窯跡に対峙する斜面にあったと推定されています。この地は高麗山と呼ばれる所ですが、現在は大半が宅地、道路に利用されています。『皿山創業調子』によれば寛永五年(1628)ごろ、岩谷川内に御道具山が設けられ、副田喜左工門が御道具山役に任命されたと記されています。『肥前陶磁史考』には「高麗山の韓人の窯跡に御道具山を築いた」とありますが、詳細は明らかではありません。まだまだ謎の多い大川内山に移る前の鍋島藩窯ですが、今回の調査で手掛かりが見つかるかもしれません。



●楠木谷窯跡　泉山に位置しています。この窯は以前、九州陶磁文化館が調査を行い，少なくとも２基以上の窯跡の存在が確認されていて、17世紀中ごろの窯であると推定されています。また、この窯の操業当時は「年木山」と呼ばれていて、寛永14年(1637)にはその名が登場しています。そして、『柿右衛門家文書』の「覚」によれば「色絵の創始は酒井田喜三衛門（初代柿右衛門）が年木山に居たころ」とあります。色絵創始期の製品を探る資料が現れるかもしれません。今回は九州陶磁文化館の未調査部分に重点を置いて、調査する予定です。

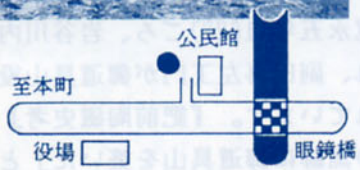
凡そ一万二千ばかりの人に御座候。山谷くづれ人死もこれ有り候ように御座候。只私共両人に若者十人ばかりにて相撲取り申し候。木戸なし、道にてなわを張り五十文づつ取り申し候。十六日七日二日取り、夫よりイマリと申す所にて十八日参り候て一日相撲致し候ところ、是も一万余の人に御座候。…」

わずかの有田関係の記事ですが、たくさんの人出があったことなど、その盛況ぶりが伝わってきます。有田興行の後、伊万里、唐津でも興行を行っており、茶碗、猪口、皿など焼き物を土産に揃え、各地で興行を行いながら江戸へ戻っています。

有田では今のところ、このような記録資料は見つかっておらず、新たな町史の１ページが加わったといえるでしょう。

江戸時代の力士

五万嶽の墓



岩谷川内の墓地の片隅に、五万嶽寛治の墓があります。五万嶽寛治は肥前出身の力士で、墓碑銘から寛政６年（1795）７月14日に没し、角力中によって墓碑が建立されたことが分かっています。外尾町・善福院の過去帳に彼の記録がみられ「寛譽勇善士（戒名）」「七月十四日（没年）」「岩崎（地名）」「五万嶽（俗名）」と記されています。果たして彼は有田・岩崎の出身だったのか、たまたま岩崎で没したのか、詳細については明らかではありませんが、肥前出身であったことは当時の江戸相撲の番付表などから見ても間違いないようです。

江戸相撲の番付表による略歴しか分かりませんが、天明６年（1786）11月の東三段目18で初めて名前が見られ、寛政２年（1790）３月の東三段目５で名前は見られなくなります。天明６年以前の番付には見当たりませんので天明６年の11月場所に付出された力士と思われます。地位も徐々に上がっていますので、かなり有望な力士だったようです。

（五万嶽寛治の調査については相撲博物館のご協力をいただきました）

街角の歴史

お知らせ

町内古窯跡発掘調査

今年度も発掘調査が始まりました。場所は、外尾山窯跡（外尾山）、天神町窯跡（岩谷川内）、楠木谷窯跡（泉山）の３か所です。

調査員をお見かけになったら、お気軽に声をおかけください。現場の説明をいたします。また、次号の館報ではその様子をお伝えします。

多々良の元古窯跡（黒牟田）の発掘風景

民俗調査

昨年度に引き続き、今年も12月に民俗調査を予定しています。昔はこうだったこと、また、昔からこうやっていることなど、町民の皆さんの生活をお聞かせください。駒沢大学の学生が調査にうかがいます。昨年同様ご協力をよろしくお願いいたします。

白川の細流

空はどこまでも高く美しく、秋風は心地よく…待っていた清々しい秋がやってきました。感傷的という言葉は似合わない私、元気にあちこちの催しに顔を出すつもりです。お祭りにおいしいたべもの、秋は本当に楽しいですね。もうじき資料館の楓の葉も色づき始めます。真っ赤に染まった道を歩くのも秋のひとつの楽しみです。皆さんもぜひお出かけください。（萬）

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報　No.15

発行年月日 ＊ 平成３年 10 月 1 日

編集・発行 ＊ 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地

☎0955―43―2678